

## 四国の鴟尾—伊予・阿波・土佐を中心に—

岡本治代<sup>1</sup>

[Haruyo Okamoto<sup>1</sup>: “Shibi” (Hip rafter-covering tile) in ancient Ehime, Tokushima and Kochi prefectures]

キーワード：瓦，鴟尾，土佐，阿波，伊予

### はじめに

鴟尾<sup>しび</sup>は、中国および周辺諸国において、古代建築の大棟両端を飾る棟飾りとして用いられる屋根部材である。日本国内で出土している鴟尾については、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館による『日本古代の鴟尾』（猪熊ほか，1980）によって全国的な資料集成がなされているほか、平成11年（1999）には大脇 潔氏による『鴟尾』（大脇・小松，1999）が刊行されている。また、平成21年（2009）には、平城宮第一次大極殿の復元に伴う瓦および瓦葺き技法についての研究をまとめた『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究 4 瓦・屋根』（岩戸，2009）が刊行され、奈良・大阪・京都における鴟尾の資料集成が行われた。その一方で、大量生産を前提とする平瓦・丸瓦や軒先瓦に比べて鴟尾は出土例が少なく、資料数が限られることから、全国的な研究は低調であった。

このような中で、平城宮・京および各地方から出土した古代瓦の地域的展開を追究してきた「古代瓦研究会」（事務局：奈良文化財研究所都城発掘調査部）は、2020年2月開催予定の第20回シンポジウムにおいて、「鴟尾・鬼瓦の展開 I - 鴟尾 -」をテーマとすることとした。筆者も、山陽・四国地域の担当者の一員として、愛媛県・徳島県・高知県で出土した鴟尾の調査を行い、発表要旨「中国・四国地方の鴟尾」（香川ほか，2019）において概要を報告している。本稿では、この調査成果をもとに、伊予・阿波・土佐の鴟尾の特徴を整理するとともに、その生産と入手の体制について検討したい。なお、香川県については、シンポジウムにおいて香川将慶氏が報告を行う予定であることから、香川氏の報告および発表要旨（香川ほか，2019）を参照されたい。また、鴟尾の各部名称については、図1に従う。

### 1. 四国における研究の現状と課題

#### (1) 鴟尾出土遺跡の分布

『日本古代の鴟尾』（猪熊ほか，1980）において、四国内の鴟尾出土遺跡として紹介されていたのは、讃岐で6遺跡（さぬき市石井廃寺，願興寺跡，極楽寺，坂出市開法寺，鴨廃寺，善通寺市仲村廃寺），伊予で1遺跡（松山市来住廃寺）であった。その後の発掘調査や資料集成により、讃岐で新たに6遺跡（さぬき市末古窯跡，高松市片山池窯跡，坂出市坂田廃寺，丸亀市田村廃寺・善通寺市善通寺，三豊市大興寺），阿波で1遺跡（美馬市郡里廃寺跡），土佐で3遺跡（香美市土佐山田町新改小山田遺跡，南国市比江廃寺跡，高知市秦泉寺廃寺跡）が確認されている。これらの遺跡の分布を示したのが図2である。讃岐の鴟尾出土遺跡数が突出している背景としては、発掘調査事例数の多寡による影響があるものと考えられるが、それ以外に何らかの讃岐特有の事情が存在した可能性も想定される<sup>1)</sup>。

#### (2) 伊予・阿波・土佐における鴟尾研究の現状

##### ①伊予

松山市来住町に所在する来住廃寺跡で出土している。愛媛県においては、近年、（公財）愛媛県埋蔵文化財センター（2017）によって、愛媛県内の古代遺跡の調査事例・出土遺物の集成が行われているが、来住廃寺跡以外の遺跡では、鴟尾は確認されていないようである。

来住廃寺跡は、小野川と堀切川にはさまれた来住台地上に位置し、北西には久米官衙郡が広がる。昭和42年（1967）以降、断続的に発掘調査が行われており、法隆寺式の伽藍配置と推定されていた。しかし、近年の調査で塔跡とされてきた基壇が金堂跡であることが明らかに

2019年12月2日受付，12月17日受理。

<sup>1</sup> 徳島県立博物館，〒770-8070 徳島市八万町文化の森総合公園。Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-cho, Tokushima 770-8070, Japan.

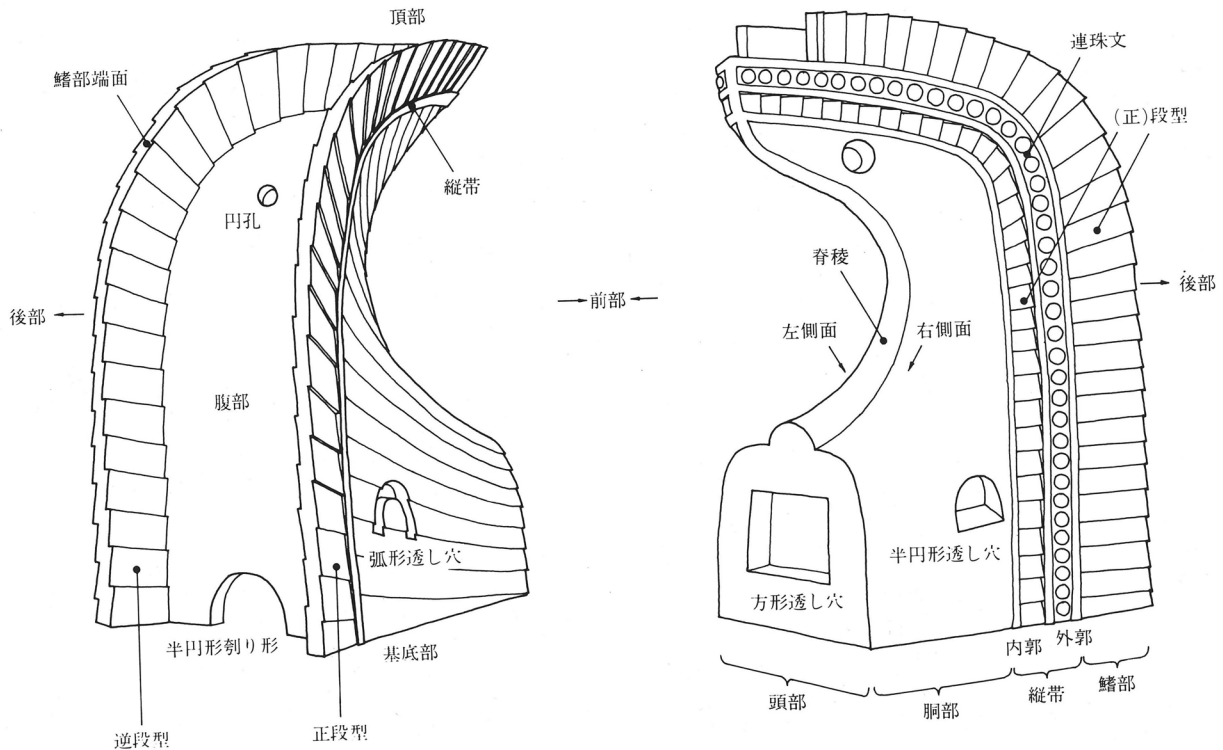


図1. 鴟尾の部分名称 [猪熊ほか(1980)より引用].

なり、伽藍配置など寺の構造を再検討する必要が生じている。金堂跡のすぐ西には久米官衙遺跡群の一角をなす「回廊状遺構」とよばれる7世紀中ごろの施設が存在するが、来住廃寺の寺域と重複していることから、7世紀後半に「回廊状遺構」を取り壊して来住廃寺を建立したと考えられている。軒瓦は、山田寺式の単弁八葉蓮華文軒丸瓦(図3-5)と三重弧文軒平瓦、法隆寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦(図3-6)と四重弧文軒平瓦、重圏文軒丸瓦などが出土している。

第2次調査において、溝SD33<sup>2)</sup>から、少なくとも2型式3個体の鴟尾(図3-1~4)が出土している(小笠原, 1979; 森, 1986)。現在、松山市考古館においては、大阪府四天王寺の鴟尾をもとに復元展示されている(図3-4)。これらの2型式の鴟尾では、鰭部が正段型の3が、鰭部を線刻で表現する2に先行して製作されたものと推定されている(小笠原, 1979)。愛媛県の瓦についての研究は、上記の(公財)愛媛県埋蔵文化財センター(2017)や、『愛媛県史』における資料集成(愛媛県史編さん委員会, 1986)、亀田修一氏による山田寺式・法隆寺式軒瓦を中心とした研究(亀田, 1994)、『遺跡』における資料集成(十亀, 2015)などがあるが、鴟尾についての分析はなされていない。

## ②阿波

美馬市郡里廃寺跡で出土している。吉野川中流域北岸の鍋倉谷川によって形成された扇状地上に位置する。昭和42年(1967)・43年(1968)に行われた1・2次調査によって、寺域を区画する「土塁」や塔跡・金堂跡が確認され、法起寺式の伽藍配置が推定された。平成17年(2005)から24年(2012)には、史跡整備に伴う発掘調査が実施されている(美馬市教育委員会, 2018)。軒瓦は、香川県さぬき市極楽寺跡やまんのう町弘安寺跡所要瓦と同範の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦(図4-6)のほか、有稜素弁八葉蓮華文軒丸瓦(図4-7)、三重弧文軒平瓦などが出土している。

平成18年(2006)の4次調査をはじめとする複数の調査<sup>3)</sup>で、鴟尾が出土している(図4-1~5)。いずれも小片であるため全体像の復元は困難だが、後述するとおり少なくとも3型式の鴟尾が出土している。そのうち4次調査で出土した鴟尾(1)は、報告書において、岡山県瀬戸内市に所在する鴟尾生産窯跡である寒風窯跡系の鴟尾と類似していることが指摘されている(美馬市教育委員会, 2007)。

なお、徳島県の出土瓦については、徳島県博物館(現徳島県立博物館)や、徳島市教育委員会社会教育課による資料集成があり(徳島県博物館, 1979; 徳島市教育委員会社会教育課, 1984)、筆者も当館の企画展図録(徳

島県立博物館, 2015)において資料集成を行っている。しかし、いずれも軒丸瓦・軒平瓦を中心とする集成であり、鷓尾については検討できていない。

③土佐

香美市土佐山田町新改小山田遺跡、南国市比江廃寺跡、高知市秦泉寺廃寺跡で鷓尾が出土している。

**新改小山田遺跡** 香美市土佐山田町新改に所在する。四国山地から新改川に流れ込む小河川によって形成された河岸段丘上に位置する。平成10年(1998)、11年(1999)に実施されたトレンチ調査において、窯跡に起因するものと推定される包含層から、沈線で段型を表現する鱗部、縦帯、方形透し孔のある頭部、半円形透し孔のある胴部破片が出土している(土佐山田町, 2002)。

**比江廃寺跡** 南国市比江に所在する。土佐国衙跡の北東端部に位置し、国分川右岸の中位下段丘先端部に立地する。昭和44年(1969)、平成元年(1989)、平成2年(1990)、平成7年(1995)、平成8年(1996)に発掘調査が行われている。塔基壇のほか、礎石建物SB-1・SB-2が検出されており、金堂もしくは講堂の可能性も指摘されている(出原, 2007)。軒瓦は、法輪寺式の均整唐草文軒平瓦(図5-2)および複弁八葉蓮華文軒丸瓦(図5-5)、

三重弧文軒平瓦、百濟系とされる鋸齒文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦(図5-3)、弁端の尖る複弁八葉蓮華文軒丸瓦(図5-4)、土佐国分寺と同範の輪郭単弁八葉蓮華文軒丸瓦などが出土している。

平成2年(1990)の調査で、土坑SK1の埋土(II層)、および瓦群1層から、鷓尾が20点以上出土している(高知県教育委員会, 1991)ほか、郷土史家の寺石正路氏のコレクションが高知県歴史民俗資料館に保管されている。しかし、これらの鷓尾の位置づけについてはこれまで言及されていない。

**秦泉寺廃寺** 高知県高知市秦泉寺に所在する。高知市北部の丘陵地から南へ流れる名切川、金谷川、東谷川など久万川の支流によって形成された扇状地上に位置する。昭和50年(1975)以来、平成29年(2017)まで、8次にわたる発掘調査が実施されており、基準方位の異なる複数の掘立柱建物跡が検出されている。軒瓦は、弁端が反転する有稜素弁八葉蓮華文軒丸瓦(図6-5)、顎面施文をもつ重弧文軒平瓦(図6-6)を主要な組み合わせとする。また、香川県善通寺跡の軒丸瓦ZN101・軒平瓦ZN203型式、徳島県阿南市内原窯跡と同範の瓦が出土している(蓮本, 2001;松田, 2004)ほか、図6-5は、阿南市立善通寺跡所用瓦と同文関係にある。3次調査<sup>4)</sup>・6次

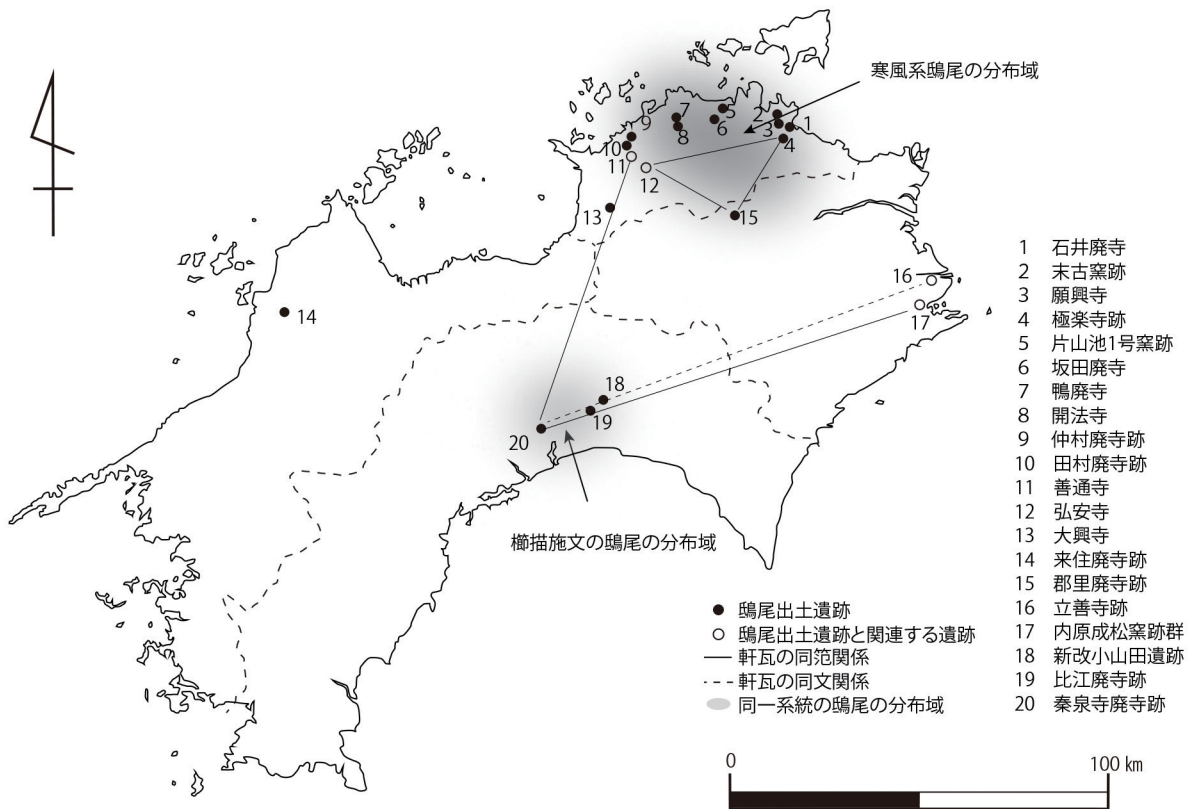


図2. 四国における鷓尾出土遺跡の分布。

調査（溝 SD2・3 東の包含層）・7次調査調査（溝 SD4）で鴟尾が出土している（図 6-1~4）。全体の形状は復元できないが、後述するとおり形態の異なる脊稜部の破片が2点出土していることから、少なくとも2型式あったことがわかる。

秦泉寺廃寺の出土瓦については、6次調査の報告書で、松田重治氏が型式分類および同範関係の整理を行っている（松田, 2004）ほか、2019年に発行された『高知市史』において池澤俊幸氏が考察を加えている（池澤, 2019）。しかし、鴟尾についての分析は、これまで行われていない。

### (3) 課題

以上のように、昭和55年（1980）の『日本古代の鴟尾』（猪熊ほか, 1980）以降、発掘調査事例の増加により、四国における鴟尾の資料数は大幅に増加している。しかし、伊予・阿波・土佐の鴟尾については、系統立てた研究は行われていないというのが現状であろう。

そこで次章以降では、まず、文様だけではなく製作技法も含めた資料分析を行い、当該地域の鴟尾の特徴を明らかにするとともに、鴟尾の地域間関係を整理する。その上で、先行研究で明らかにされつつある同範・同文瓦の分布と、鴟尾の分布とを比較することにより、鴟尾の生産・入手の体制について考察したい。

## 2. 文様および製作技法の分析

それでは、伊予・阿波・土佐の鴟尾を集成するとともに、その文様や、製作技法（焼成・調整・成形技法）を分析する。

### (1) 伊予

来住廃寺跡（図 3） 3・4 は、鱗部および胴部に近い下端部などの破片である。焼成は須恵質で灰白色を呈す。全体にナデ調整を施している。鱗部には、幅約 5.0~6.0 cm の連続する段が設けられている。残存部を見る限り胴部は無紋である。下端部の破片から半円形の透孔が空けられていたものと推定される。また、同一部位（左側面の透孔）の破片が2点存在することから、少なくとも2個体あることがわかる。

1・2 は、胴部下端と、頂部に近い鱗部から胴部の破片である。焼成は土師質で灰白色~にぶい橙色を呈す。全体にナデ調整を施す。3とは異なり、胴部に透孔はなく、下端部が肥厚する。鱗部の文様はへら描沈線で表現する。また、胴部と鱗部の接続部を見ると、鱗部が胴部と連続するのではなく、大きく外に開く角度で接続する。

### (2) 阿波

郡里廃寺跡（図 4） 1 は、蕨手状の文様を施した鱗部で、寒風窯跡の B 型式に類似している。焼成は甘く黄灰色を呈し、全体にナデ調整を施す。2 も同じく4次調査で出土した縦帯で、焼成・調整は1と同様である。3 は木葉文を陰刻する鱗部で、寒風窯跡 C-2 型式に類似している。4 は、へら描沈線で木葉状の文様を表現した鱗部である。寒風窯跡 C-1 型式や宮崎窯跡で出土している木葉文の鴟尾の影響を受けて成立したものと推定される。焼成は須恵質で固緻である。側面に小円孔を有し、拒鵠きよじやくを立てたものと推定される。

### (3) 土佐

今回の調査において実現できた比江廃寺跡、秦泉寺廃寺跡出土の鴟尾について記述する。

比江廃寺跡（図 5） 1 は、頂部に近い脊稜から胴部にかけての破片で、脊稜と交差する凸帯を配する。脊稜は上面が山形を呈し、稜の左右に沈線で表現した直径約 2.5 cm の珠文帯を配する。同様の珠文帯は、脊梁と交差する凸帯にもみられる。全体にナデ調整を施し、胴部には、脊稜と平行する方向の幅 2.0~3.0 cm の櫛描文を、約 2.0~5.0 cm の間隔を空けて施す。同様の櫛描文（ハケメ調整）は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦（4）の裏面にも施されていることから、鴟尾と組み合わせる可能性が想定される。焼成は堅緻で青灰色を呈す。

秦泉寺廃寺跡（図 6） 1 は鱗部で、櫛状の工具で鱗状の文様を描き、端部には波状文を施す。2 は脊稜部から胴部にかけての部分で、脊稜上面が平坦になる。脊稜の右半が欠損しているが、左下には沈線で表現する円形の文様が配されている。また、脊稜の左右に、櫛描文を施す。3 は、上面が山形を呈する脊稜で、稜の左右に櫛描波状文を施したあとで、円形の文様を施す。2 に比べると大ぶりである。比江廃寺跡出土の鴟尾と同型式と考えられる。4 は縦帯と推定される破片で、櫛描波状文を施している。これらの鴟尾の破片はいずれも土師質焼成で、黄灰色を呈する。有稜素弁八葉蓮華文軒丸瓦（5）の瓦当裏面にハケメ調整が施されていることから、鴟尾と組み合わせるものと考えられる。

## 3. 伊予・阿波・土佐における鴟尾の系譜

2章の分析をもとに、図 2 に、同一系統の鴟尾の分布域、伊予・阿波・土佐の軒瓦と他地域の寺院の所用瓦との同範・同文関係を示した。これを見ると、以下のような傾向を指摘することができる。

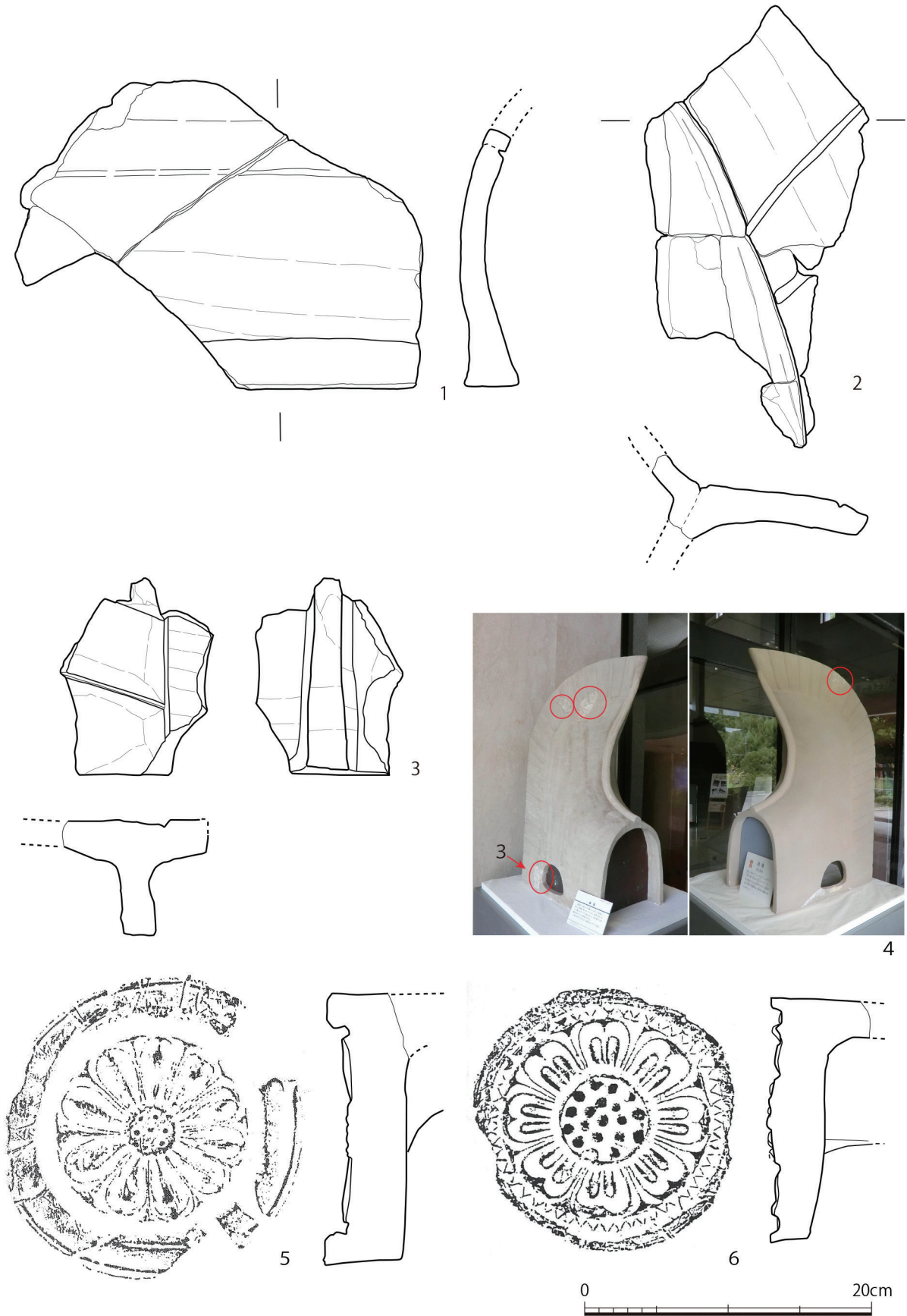


图3. 愛媛県松山市来住廃寺跡出土瓦.

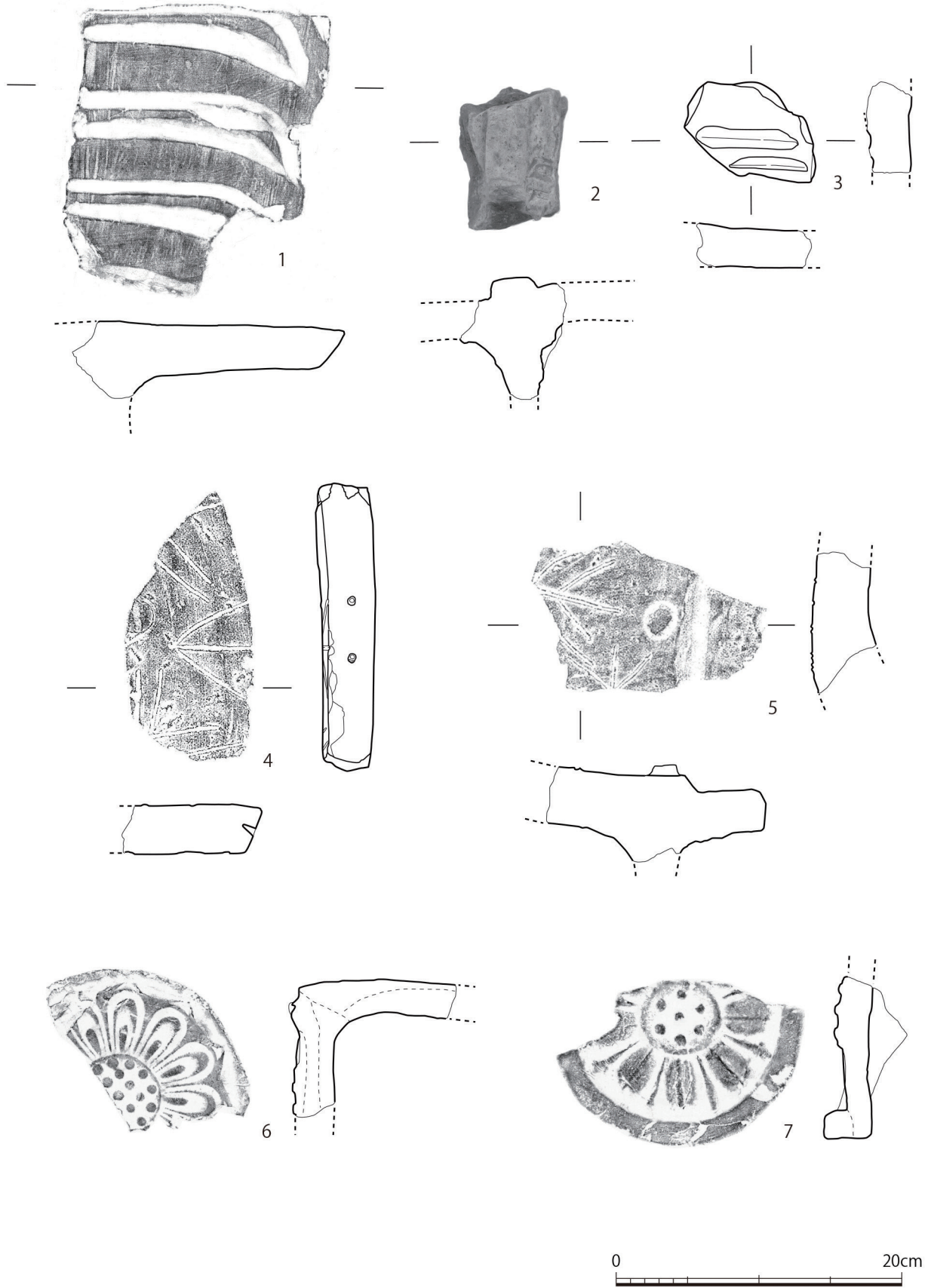


图4. 徳島県美馬市郡里魔寺出土瓦.

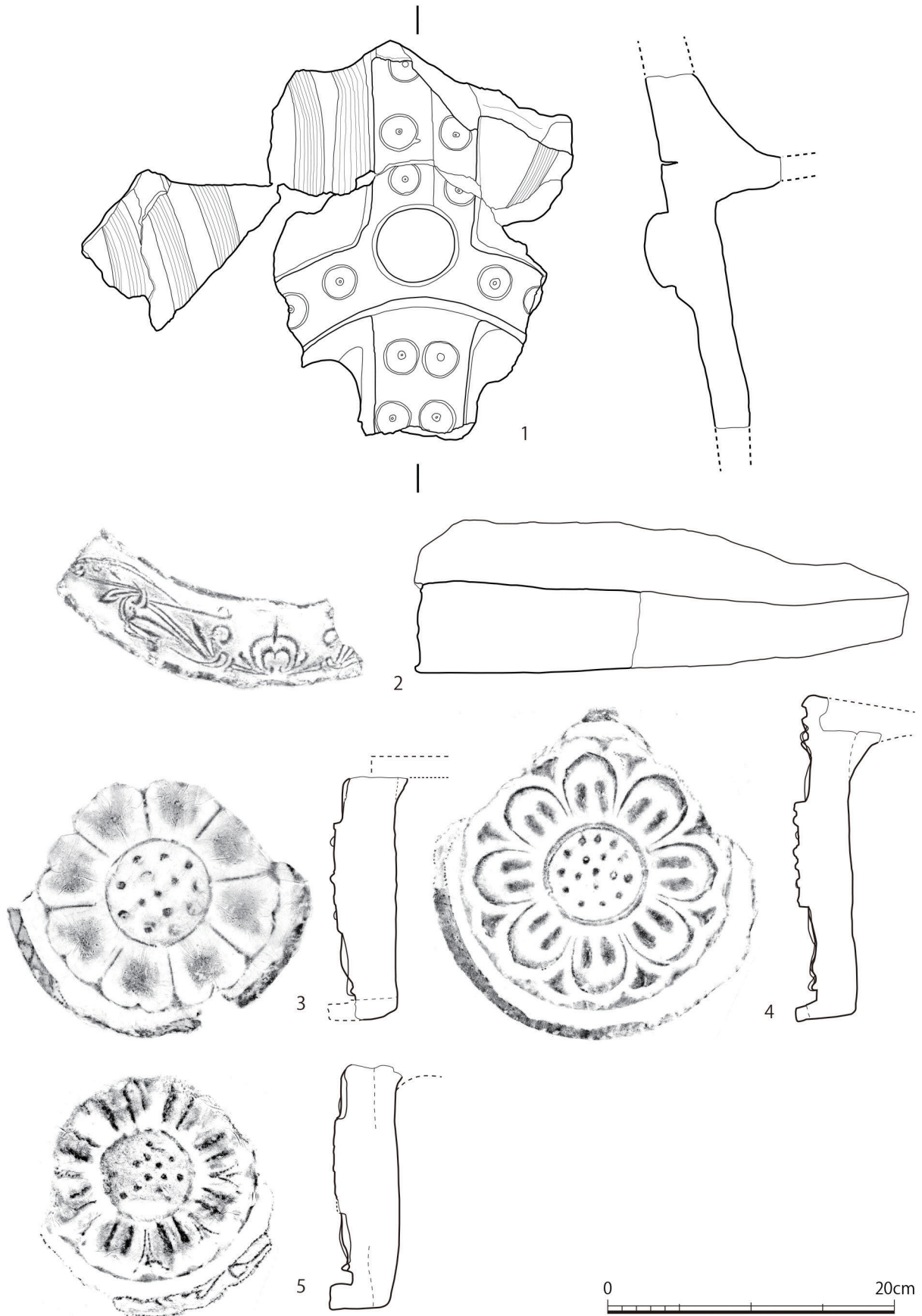


图5. 高知県南国市比江廃寺跡出土瓦.

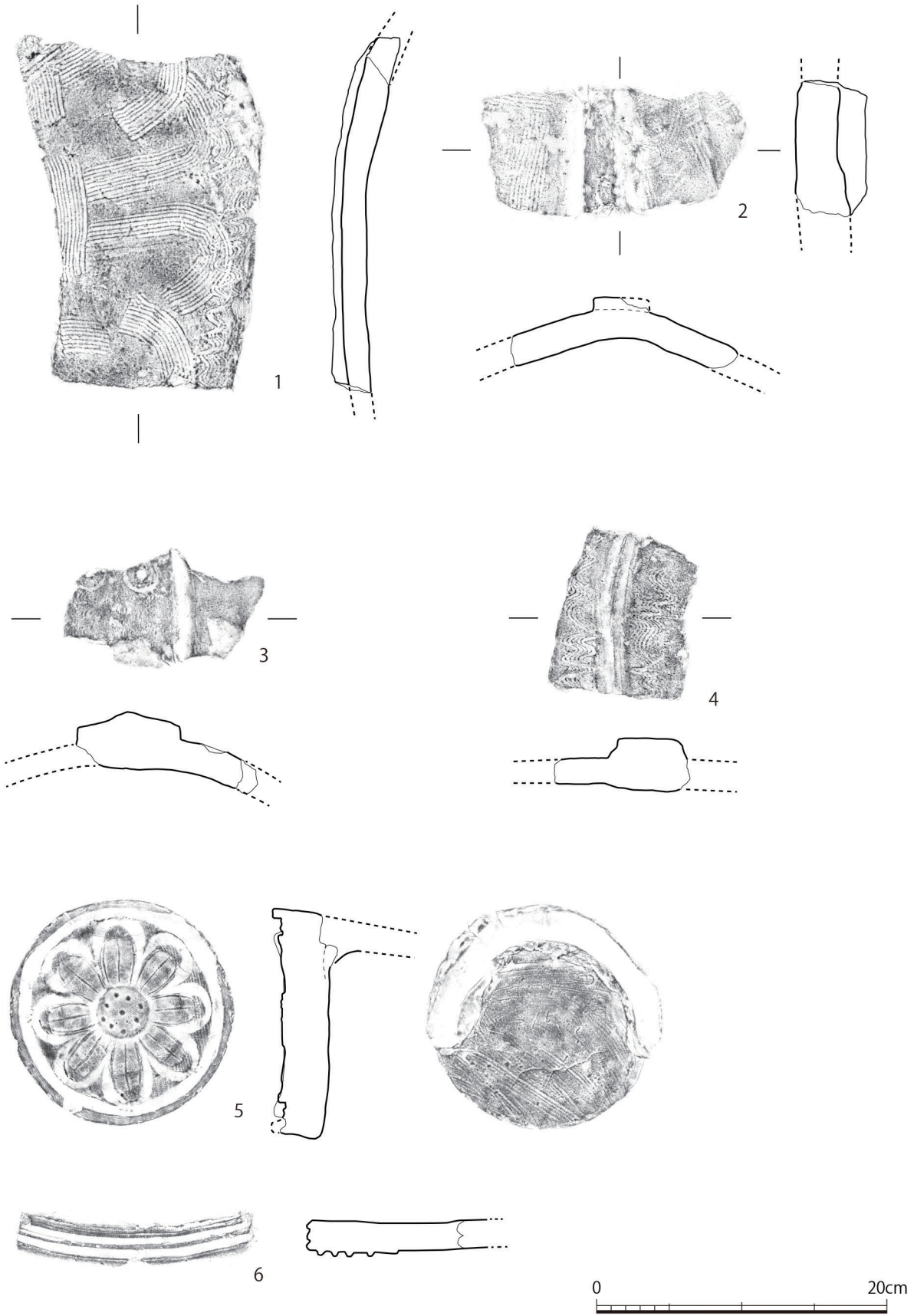


图6. 高知市秦泉寺廢寺跡出土瓦.



### (1) 伊予・阿波・土佐の関係

伊予・阿波・土佐の軒瓦については、土佐秦泉寺廃寺跡と阿南市立善寺跡・内原瓦窯跡で同範・同文関係があるものの、立善寺跡・内原瓦窯跡ではこれまでに鴟尾が出土していない。また、ここまで分析してきた鴟尾を見ても、これら三地域に共通性はみられない。今後の発掘調査の進展により、新たな資料が出土する可能性はあるものの、現状では、鴟尾の生産・入手において伊予・阿波・土佐の関係は希薄であったといえよう。

### (2) 他地域の鴟尾との関係

それでは、伊予・阿波・土佐では、どのような地域との関係のもと鴟尾を生産もしくは入手したのであろうか。

#### ①伊予

来住廃寺では、鱗部が正段型で、一条の縦帯、半円型の透孔がある無紋の胴部をもつ鴟尾が出土している。胴部が無紋の鴟尾は、7世紀後半の三重県辻垣内二号窯や、大阪府鳥坂寺講堂、和歌山県佐野廃寺・上野廃寺などで出土している（大脇・小松 1999：53）。また、来住廃寺で出土している山田寺式軒丸瓦は大阪府四天王寺例に近いとされており（亀田，1994）、松山市考古館においても四天王寺例をもとに鴟尾が復元されている。しかし、来住廃寺例の残存部の少なさもあり、その祖形となる資料は特定できない。また、鱗部が外側に大きく開く型式については、畿内以外の地域からの影響や、伊予国内で創出された型式である可能性を想定する必要があるかもしれない。

#### ②阿波

郡里廃寺跡では寒風B型式およびC-2型式の鴟尾が出土している。近隣地域で寒風系の鴟尾が出土しているのは、香川県さぬき市石井廃寺・末古窯跡・願興寺・極楽寺跡、高松市片山池1号窯跡、坂田廃寺である。郡里廃寺跡では極楽寺跡と同範の軒丸瓦（図4-5）も出土していることから、鴟尾もこれら東讃地域の寺院との関係のもと、入手もしくは生産されたものと考えられる。

木葉文の鱗部をもつ鴟尾については、岡山県寒風窯跡C-1型式や宮嶮窯跡で出土している木葉文の鴟尾の影響を受けて成立したものと推定されることから、岡山から香川にかけての寒風系鴟尾の分布域に郡里廃寺跡も含まれるものと考えられる。

#### ③土佐

比江廃寺跡・秦泉寺廃寺から出土する鴟尾は、いずれ

も櫛状工具で施文されており、珠文帯を配した山形の脊梁部をもつ点も共通していることから、同一系統の鴟尾と考えることができる。したがって、比江廃寺跡と秦泉寺廃寺跡では、同一系譜の工人集団（もしくは瓦窯）から鴟尾を入手していたと考えられる。軒瓦の瓦当文様については、両寺院の間で共通性はみられないが、瓦当裏面を櫛状工具で調整する技法が比江廃寺跡の軒丸瓦（図5-4）と、秦泉寺廃寺跡の軒丸瓦（図6-5）に共通しており、これらの軒丸瓦が生産・入手された時期に両寺院の瓦生産組織の間で何らかの交流があった可能性も想定される。

一方で、土佐国外においては、比江廃寺跡・秦泉寺廃寺跡の鴟尾の類例は確認できていない。たとえば、秦泉寺廃寺跡と同範の瓦が出土している讃岐の善通寺跡においても、これまでに出土している鴟尾は鱗部が正段型であり、土佐の鴟尾との共通性は見出せない。また、比江廃寺跡では、法輪寺式の軒平瓦が出土しているが、比江廃寺跡の鴟尾の系統は法輪寺のものとは異なる。比江廃寺跡・秦泉寺跡では、このような瓦以外に、百済系の素弁蓮華文軒丸瓦や、顎面施文をもつ重弧文軒平瓦など、朝鮮系瓦が数多く出土している。したがって、朝鮮半島や、日本列島内で朝鮮半島からの影響が強い地域に土佐の鴟尾の類例を求めることができるかもしれない。

## 4. 軒瓦の生産・入手と鴟尾の生産・入手

以上のとおり、各遺跡から出土した鴟尾の特徴と系譜関係を整理してきた。最後に、軒瓦の分布と鴟尾の分布とを比較することにより、鴟尾の生産・入手体制について考察したい。

今回、鴟尾を主体として分析した結果、先行研究（蓮本，2001；松田，2004；徳島県立博物館，2015 清野ほか，2018 など）において、瓦の同範・同文関係が指摘されていた寺院間において、鴟尾にも共通性がみられる例（阿波郡里廃寺と讃岐極楽寺跡）と、異なる系譜の鴟尾をもつ例（土佐秦泉寺廃寺跡と讃岐善通寺跡）が存在することが明らかになった。前者の場合には、少なくともある時期において、寺院間で軒瓦と鴟尾を一体的に生産もしくは入手したものと理解することができよう。逆に、後者の場合は、寺院造営過程において、軒瓦と鴟尾とを異なるタイミングで、もしくは異なるルートで、生産・入手したものと考えられる。

このように、四国における鴟尾の生産・入手のパターンには複数の形態が存在することがわかる。その明確な理由は不明だが、平瓦・丸瓦・軒瓦は大量生産を前提と

する瓦であるのに対して、鴟尾は建物1棟あたり2個体に限られることから、生産・入手の頻度は著しく低かったものと考えられる。したがって、画一的な生産・入手のパターンは見られず、消費者である寺院において鴟尾の需要が生じた際に、それぞれの事情—寺院造営氏族間の結びつきや寺院造営のタイミング、鴟尾生産遺跡との距離、など—に応じて、時に軒瓦と同じルートから、時には異なるルートから、鴟尾を融通していたのかもしれない。この点については、讃岐も含めたさらに多くの事例を踏まえて検証する必要があるだろう。

## おわりに

以上のように、伊予・阿波・土佐の鴟尾を対象として、その生産・入手の体制を検討してきた。「古代瓦研究会」シンポジウムにおいては、全国的に様々な鴟尾が集成され、議論が交わされることと思われる。シンポジウムの結果を受けて、改めて四国地域における事例について検討したい。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、下記の皆様にお世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

池澤俊幸・香川将慶・梶原瑞司・久家隆芳・小島靖彦・小玉亜紀子・下村 裕・浜田恵子・松浦誠仁・山本 亮・高知市教育委員会・高知県立埋蔵文化財センター・松山市教育委員会(松山市考古館)・美馬市教育委員会(個人・機関の順、敬称略、五十音順)。

## 註

- 1) 特に東讃を中心とする地域で出土する鴟尾の多くは、岡山県瀬戸内市寒風窯跡系の鴟尾である。寒風窯跡は、瀬戸内海を挟んで讃岐の対岸に位置しており、その製品は大阪府細工谷遺跡など広域に供給されていたことが明らかにされている。讃岐における鴟尾出土量の多さは、このような大規模生産地との距離の近さが影響している可能性がある。また、東讃における鴟尾出土遺跡は、藤原宮式軒瓦の出土遺跡と重なっていることから、7世紀末における東讃地域と中央との関係についても視野に入れる必要があるだろう。
- 2) 森(1986)の本文中にはSD13と記されているが、挿図ではSD33となっている。
- 3) 『郡里廃寺跡第4次発掘調査概要報告』(美馬市教育委員会, 2007)によれば、郡里廃寺跡では4次調査以前

に無紋の鴟尾が出土しているとされるが、今回の報告に伴う調査では実見することができなかった。また、本稿に掲載した図4-3・4についても、『郡里廃寺跡発掘調査報告書』(美馬市教育委員会, 2018)に出土地点の記載がなく、出土状況は不明である。なお、徳島県立博物館が所蔵する郡里廃寺跡第1次調査・第2次調査の出土資料には、図4-2と同型式の鴟尾縦帯・図4-4と同型式の鴟尾鱗部(「1967年表採」との注記がある)が含まれている。

4) 『秦泉寺廃寺跡—第3次発掘調査—』(山本, 1984)では、鬼瓦として報告されている。

## 参考文献

- 出原恵三. 2007. 比江廃寺跡Ⅲ. 89 p. 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 高知.
- 愛媛県史編さん委員会編. 1986. 愛媛県史 資料編 考古. 829 p. 愛媛県, 愛媛.
- 蓮本和博. 2001. 白鳳時代における讃岐の造瓦工人の動向—讃岐, 但馬, 土佐を結んで—. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要, 9: 29-53.
- 池澤俊幸. 2019. 古代編. 高知市史編さん委員会考古部会編, 遺跡が語る高知市の歩み 高知市史考古編, p. 75-111. 高知市, 高知.
- 猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志. 1980. 日本古代の鴟尾. 154 p. 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館, 奈良.
- 岩戸晶子. 2009. 奈良・大阪・京都における鴟尾資料集成. 奈良文化財研究所編, 平城宮第一次大極殿の復元に関する研究 4瓦・屋根, p. 66-105. 奈良文化財研究所, 奈良.
- 香川将慶・妹尾周三・岡本治代・白石純. 2019. 中国・四国地方の鴟尾. 古代瓦研究会第20回シンポジウム発表要旨, 印刷中. 古代瓦研究会, 奈良.
- 亀田修一. 1994. 地方への瓦の伝播—伊予の場合—. 古代, 97: 1-37.
- 川畑聡. 1996. 讃岐の古瓦展. 127 p. 高松市歴史資料館, 香川.
- 高知市教育委員会. 2004. 秦泉寺廃寺(第6次調査). 154 p. 高知市教育委員会, 高知.
- 高知市教育委員会. 2018. 秦泉寺廃寺跡(第7次調査). 136 p. 高知市教育委員会, 高知.
- 高知県教育委員会. 1991. 比江廃寺跡発掘調査概報. 32 p. 高知県教育委員会, 高知.
- (公財)愛媛県埋蔵文化財センター. 2017. 伊予の古代

- 未知なる伊予国府の探求に向けて— 192 p. (公財) 愛媛県埋蔵文化財センター, 愛媛.
- 松田重治. 2004. 秦泉寺廃寺出土の軒瓦～様式の共有に見られる同族意識～. 高知市教育委員会編, 秦泉寺廃寺 (第6次調査), p. 79-100. 高知市教育委員会, 高知.
- 丸山美和. 1993. 来住廃寺出土瓦について. 松山市教育委員会編, 来住廃寺遺跡—第15次調査—, p. 112-116. 松山市教育委員会, 愛媛.
- 美馬町教育委員会. 1968. 立光寺跡の発掘調査. 15 p. 徳島県教育委員会・美馬町教育委員会, 徳島.
- 美馬町教育委員会. 1969. 阿波・立光寺跡発掘調査概報. 12 p. 徳島県教育委員会・美馬町教育委員会, 徳島.
- 美馬市教育委員会. 2007. 郡里廃寺跡第4次調査概要報告書. 12 p. 美馬市教育委員会, 徳島.
- 美馬市教育委員会. 2018. 郡里廃寺跡発掘調査報告書. 94 p. 美馬市教育委員会, 徳島.
- 森 光晴. 1986. 12 来住廃寺. 愛媛県史編さん委員会編, 愛媛県史資料編 考古編, p. 649-652. 愛媛県, 愛媛.
- 小笠原好彦. 1979. E 鷗尾. 松山市教育委員会編, 来住廃寺, p. 46-48. 松山市教育委員会, 愛媛.
- 大脇 潔・小松和彦. 1999. 鷗尾. 98 p. 至文堂, 東京.
- 清野孝之・藤川智之・松林玲美・岡本治代. 2018. 藤原宮式軒瓦からみた阿波・讃岐東部の交流の様相. 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱, 12:1-28.
- 十亀幸雄. 2015. 特集 愛媛の古代寺院. 遺跡, 49:1-86.
- 徳島市教育委員会社会教育課. 1982. 歴史時代徳島島市—阿波の古瓦—. 56 p. 徳島市教育委員会, 徳島.
- 徳島県博物館. 1979. 阿波の古代寺院. 11 p. 徳島県博物館, 徳島.
- 徳島県立博物館. 2015. 瓦から見る古代の阿波—寺院と役所—. 83 p. 徳島県立博物館, 徳島.
- 土佐山田町教育委員会. 2002. 新改小山田遺跡. 57p. 土佐山田町教育委員会, 高知.
- 山本哲也. 1984. 秦泉寺廃寺跡—第3次発掘調査—. 86 p. 高知市教育委員会, 高知.

### 挿図出展

- 図1: 猪熊ほか (1980) より引用.
- 図3-3: 小笠原 (1979) 所収の図を再トレース; 図3-5・6 拓本: 丸山 (1993) より転載, 断面図: 丸山 (1993) 掲載図を再トレース; 図4-3・3・5 拓本: 美馬市教育委員会 (2018) より転載, 断面図: 美馬市教育委員会 (2018) 所収の図を再トレース; 図6-6 断面図: 高知市教育委員会 (2018) 所収の図を再トレース.
- 上記以外は筆者が作成.

### 資料所蔵機関

- 図3: 松山市教育委員会 (松山市考古館), 図4-1~5: 美馬市教育委員会, 図4-6・7: 徳島県立博物館, 図5: 高知県立埋蔵文化財センター.